

『十月の末』

宮沢賢治

嘉ッコは、小さなわらじをはいて、赤いげんこを二つ顔の前にそろへて、ふっふつと息をふきかけながら、土間から外へ飛び出しました。外はつめたくて明るくて、そしてしんとしています。

嘉ッコのお母さんは、大きなけらを着て、縄を肩にかけて、そのあとから出て来ました。

「母、昨夜、土あ、凍みだぢやい。」嘉ッコはしめった黒い地面を、ばたばた踏みながら云ひました。

「うん、霜あ降ったのさ。今日は畑あ、土あぐぢやくぢやくがべもや。」と嘉ッコのお母さんは、半分ひとりごとのやうに答へました。

嘉ッコのおばあさんが、やつぱりけらを着て、すっかり支度をして、家の中から出て来ました。

そして一寸手をかざして、明るい空を見まはしながらつぶやきました。

「爺んごあ、今朝も戻て来ないがべが。家であこつたに忙がしでば。」

「爺んごあ、今朝も戻て来ないがべが。」嘉ッコがいきなり叫びました。

おばあさんはわらひました。

「うん。けづな爺んごだもな。酔たぐれでばがり居で、一向仕事助けるもさないで。今日も町で飲んでらべあな。うなは爺んごに肖るやないぢやい。」

「ダゴダア、ダゴダア、ダゴダア。」嘉ッコはもう走って垣の出口の柳の木を見ておました。

それはツンツン、ツンツンと鳴いて、枝中はねあるく小さなみそさゝいで一杯でした。

実に柳は、今はその細長い葉をすっかり落して、冷たい風にはほんのすこしゆれ、そのてっぺんの青ぞらには、町のお祭りの晩の電気菓子のような白い雲が、静に翔けているのでした。

(抜粋)